



小池 光選

煮干し噛み奥歯がぼろり欠けたとき静かな春の雪を見ていた

【評】煮干しを噛むくらいでぼろりと欠けた奥歯。これが老いの現実だ。外はしずかな春の雪。だまってそれを見る。上句から下句への展開に意外性あって、はっとさせられる。愛しんだ手袋失くしこんなにも物との別れ悲しいものか

【評】知人を亡くしたときは誰でも悲しいが、愛着あるモノをなくしても同じだ。なぜか気に入っていた手袋。そんなものまた買えばいいじゃないか、と人はいうが、そうではない。いちだんいちだん妻は「階」のほりきて「月の庭の福寿草を告ぐ」

【評】妻は足が辛くなって、階段を昇るのも一苦労。いちだんいちだん昇ってきて福寿草が咲いたのを告げる。春は、必ず来る。醍醐寺で五重の塔を見上げれば千年の時われば小さし

大木の切株に座し日向ぼけ 尾骨より根の生えてくるやも

さっちゃんの声がきらきらはすんでた学校帰りの粉雪のなか

老いて今自らに言ふ「忘れ物ないか」と父の終の言葉を

少しづつ膝の痛みの薄らきて誰にもなく云ふありがたう

耳遠き吾に滑舌悪き夫喧嘩するの煩寄せあつて

数学の苦手意識はトラウマで八十路の吾を夢に悩ます

宇都宮市 津布久 勇
東京都 内田 恵子
太田市 木戸 健房
群馬県 内田 圭子
神戸市 西 和代
東京都 青木 公正
枚方市 鍵山奈美江
高石市 出水美智子
芦屋市 宮本 允子
大阪市 黒田 道子

栗木 京子選

耳鼻科へと通院するは久しぶり二人の受付嬢も替わりて

【評】花粉症の季節になると耳鼻科に通うのかもしれない。久々に行く受付の女性が替わっていた。二人とも替わっていたのがポイント。さり気ない発見が光る歌である。

襟立てて車掌は雪を浴びてをり坊つちやん列車の暗きデッキに

【評】愛媛県松山市内を走る「坊つちやん列車」。夏目漱石の小説「坊つちやん」の世界を思わせる。折からの雪に襟を立てる車掌も明治の世から現れたようで印象に残る。

谷川に沿って奥へと送電線数戸住むらし空の小さく

【評】谷川の奥へと続く送電線。ライフラインの尊さを感じる。結句からは山々が迫っている様子がわかる。横図の整った一首。

庭すみに灯のともるがにつばきの一ひと株咲けり古き我が家

靴下を脱いでわが子が駆けていた野火止の森の春踏みしめる

百歳の文通の友一人得てわれも目指さむあと二十年

去年の秋伐りし女松の年輪を指あて数う雪どけのとき

手品する前に手品を見る態度話せば即座に背を伸ばす子ら

息子らが帰りしあとは連れ合いと蟹のおじやをぼんやり食べる

高性能マスクは息を結露させ拭くに拭けない満員電車

八王子市 斎賀 勇
松山市 宇和上 正
兵庫県 和泉 純子
生駒市 手束 弘子
新座市 大谷 善邦
甲斐市 後藤 栄子
岡崎市 三上 正
松阪市 山本 公策
横浜市 高野 令子

俵 万智選

劇場の階段席で一家族のドラマを鑑賞する難人形

【評】視点を逆転させることで、日常の光景にホラー味が出た。赤い難人形は劇場の階段席だったのか。そこから無言で鑑賞される家族劇は、まことにリアルなものである。

ほめられた淡い記憶がほどこけない母に編まれた三つ編みのこと

【評】母が編んでくれた三つ編みをほめられたという記憶。それが今でも心の中にある。「ほどこけない」が記憶と三つ編みの両方にかかっているところが味わいだ。

十枚の切手シートのミッフィーが一人またひとり出かけゆく春

【評】同じ切手シートに並ぶミッフィーだが、投函されればそれぞれの行き先は異なる。ピクニックにでも行くような下の句が楽しい。

木漏れ日がまだらにゆれる彼のこと私も好きだなんて言えない

どうせなら嫌いと言ってほしかったごめんなさ

いはいせつない言葉

元肉屋看板屋元本屋元靴屋四人酒酌み交わす

「とつぜん」を交換したらパソコンは「結婚した」と既婚になった

革靴やハイヒール脱ぎ全員が安スリッパを履く講演会

花のない羊歯にも言葉あることを君がすき家で教えてくれた

君の口から出た花の名にどこか知らない街の風が香った

東京都 武蔵 義哉
埼玉県 鈴木みろ子
埼玉県 増田 正
甲府市 村田 一広
東京都 佐藤 一郎
東京都 佐藤 一郎
四万十市 佐竹 紫円

黒瀬 珂瀾選

スマホ越しのおしゃべり止まぬ孫娘うしろの雛がゆらきはじめる

【評】雛人形たちが揺れ出したのは、普通に考えれば外の振動や地震などのせい。でも、「ちゃんと私たちを見て！」と騒ぎ出したのだと思えば、ちょっとホラーな短歌ですね。芽吹かないものだってある三月の廃車置場に昼の雨降る

【評】すべての命が育つわけではなく、すべての努力が実るわけでもない。無為に帰る存在もすべて含めて、この世界は成り立つ。屋の雨の寂寥感が、読者に余韻を残します。

十八歳高校生の語り部が静かに説くは震災、廃炉

【評】東日本大震災の記憶をいかに繋げてゆくか。「震災」という過去、そして「廃炉」へのこれから。長い時間を語る次世代の姿。時給より高い書籍を購って海綿状の心を満たす

チュニジアの紀元前より変わらざる羊と羊飼いはるかなり

生者死者の無言なる間を揺れながら香煙はし朝に溶けゆく

地下足袋をはきて散歩に出る夫の農に染む背に地の匂いせり

放たれし稚魚はたちまちしるがねの腹ひるがへし流れにおよぐ

掴みぬし塩を少しく戻したり白菜漬けつつ思ふ血庄

「長生き」をしてねとチョコをくれた孫いつしか知るらん恋のかけひき

大阪府 木村由里亜
奥州市 境 朝子
那須塩原市 野崎 征子
勝浦市 里見 綱枝
富山市 河合 梢
奈良市 上田たつお
東京都 大室 英敏